

人の骨ほどよく売れる —骨格標本ビジネスのタブーなき世界—

長野 光

日経ビジネスニューヨーク支局記者

人が見向きもしないものを喜んで集める特殊な収集癖をもつ人がいる。米オクラホマ州オクラホマシティ在住のジェイ・ヴィルマレットはそんな奇妙な収集家のひとりである。子供のころから彼が好んで集めたのは動物の骨だ。自然のなかで白骨化した動物の骨を拾い集めては、その独特の色や形や質感を楽しみ、やがてプラモデルのように骨を組み立て全体像を復元するようになった。鳥類、魚類、爬虫類……、あらゆる動物の骨を集めてはせっせと磨いて組み立てる。ちょっと不気味だが、これも健全な個人の趣味である。

彼は十代の時に学者がどのように骨格標本を制作するかについて記した資料を目にする。骨格標本とは、博物館や理科室にある骨の標本だ。標本をつくる際に小さな虫に骨に残った肉を食べさせて骨をきれいにする方法が文献には紹介されていた。虫を使えばもっと簡単にきれいに骨が磨ける。彼は森に入り動物の死骸に付着した小さな昆虫を採取しては持ち帰った。そして虫をさまざまな死骸の上に這わせ、死肉を食べる虫と食べない虫をよ

り分ける作業をくり返した。小さな虫は死骸の隅々まで這い回り微細な肉や組織を喰い尽くす。

虫を使うことを学んでからは以前にも増して標本づくりに没頭した。やがて動物の死骸をきれいに骨にする若者の噂を聞きつけ、地元の狩猟家がハンティングで仕留めた獲物を携えて彼の元を訪れるようになった。仕留めた獲物を骨にして自宅に飾りたい。次から次へとリクエストは絶えず、骨づくりは仕事になっていった。勤めていた会社をやめ、1986年に妻のキムとともに骨格標本を制作して販売する会社スカルズアンリミテッドを設立した。この会社ではあらゆる動物の死骸を引き取る。通りで車にはねられた動物の死骸、亡くなったペットの死骸、浜に打ち上げられた巨大な鯨の死骸まで、骨のある動物なら死骸は何でも受け付ける。腐敗の進行したものや、ほとんどミイラ化したものまで死骸はさまざまな状態で運ばれてくる。死骸が標本になるまでの期間はサイズや状態によって異なるが、平均は2カ月だ。

初めてヒトの遺体を骨にしたのは1989年のこと、病